NPOを設立 社会貢献を目指す

大田・花とみどりのまちづくり 事務局長　牧野ふみよさん

２００２年、ＮＰＯ大田・花とみどりのまちづくりを立ち上げた時の牧野さんは一児の母、造園設計事務所の非常勤スタッフ。その少し前は専門学校で学生の就業先開拓営業をこなし、かつ講師も。そして今もとにかく忙しい。まちを花とみどりでいっぱいにするために、少しも休まず動く人。

花が好き、農業が好き。理科大では化学専攻ながら、４年次に都立農業試験場研修生に応募。営農意志のある者という募集基準からははずれていたのですが、見どころありと入所を認められ、グリーンとの関わりの第一歩を踏み出しました。

就職も縁あって三鷹市農業協同組合（現ＪＡ東京むさし）に。ここでの５年間の勤務は、「農家の方たちにみっちり鍛えられた期間」だったと言います。

やがて大田区在住の男性との出会いがあって結婚退職するのですが、出産までの間も花卉について学ぼうと専門学校に入学。さらに在学中に取得した資格を活かしスキルアップもはかりたいと、任意団体「グリーンアドバイザーの会」を創り、緑の普及活動を始めました。

折しも02年度末で大田区公園緑地振興公社の廃止が決まります。活動の場の存続を願う公社の「緑のボランティア」がＮＰＯの設立を模索する中、牧野さんは「調整役」として関わりました。そして多くの人たちの熱意を結集して「大田・花とみどりのまちづくり」の誕生にこぎつけたのです。

花とみどりに関わること、また、関わる人を増やす啓発活動を通して、安心安全で暮らしやすいまちづくりを目指したい、目的を大きく掲げていざ活動開始！

花いっぱい、緑いっぱいのまちづくりを目指して

しかし、「花とみどりのまちづくり」設立後３年ほどは組織運営や、初めて体験する公共事業の受託運営で、本当に大変だったそう。区の事業受託が、造園などの関係業者に競合と受け止められたこともありました。業者との事業内容の差別化、線引き、ＮＰＯの立ち位置を理解してもらうためには、膨大なエネルギーと時間を要したと振り返ります。

今年、設立10年を迎えた「花とみどり」は１３０人の会員を抱えるまでの組織に育ちました。花壇整備、山野草育成活動、保育園や福祉施設での花植えの手伝い、花苗育成、区民農園管理、平和の森公園では「みどりの縁側」と名付けた常設館を運営するなど、幅広く事業を展開しています。

06年からはグリーンアドバイザー有資格者10人で創設したＮＰＯ　Ｇｒｅｅｎ　Ｗｏｒｋｓの代表も務め、東北被災地へもたびたび出向くなど、牧野さんのみどりの活動はいまや全国区。座右の銘は「早く行きたければ一人で行きなさい。遠くまで行きたければみんなで行きなさい（アフリカの諺）」。だから「皆で行くために必要な人・モノ・経費を獲得する、それが今の私の仕事」と。ＮＰＯといえども必要な経費は獲得しなければ継続は難しい。自身もコーディネーター料を得ることを常に意識する、それが後に続く人の育成につながると、過去の経験から強く胸に刻んでいます。志を形にするために仲間を集め、活動を継続させるために「事業化」することで、未来につながる―ＮＰＯという緩やかな活動の場が根付く地域は、目的以外にも多くの副産物がもたらされるに違いありません。